

宮崎日向方言における「ダカラヨ」の使用状況

— 中学生・高校生を対象にした調査を中心に —

黒木 明日菜

一、はじめに

一・一、研究動機

東京都に生まれた私は、十歳の時に宮崎県の日向市に転居し、日向市で六年間、さらにその後宮崎市で三年間を過ごした。

宮崎市に転居してから、そこで使用されている方言が、私がそれまで日向市で使用していたものと多少違っていることに気付いた。

その中でも、私が驚かされたものが、「ダカラヨ」類(ダカラヨ・ジャカラヨ・ヤカラヨほか)の使用であった。「ダカラヨ」類は、会話の相手に対して同意を示す際に頻繁に使用される。私のような、他の地域から来た者が初めてこれを耳にすると、接続詞の「だから」と捉えて、ついその続きを待つてしまう。しかし、「ダカラヨ」類が使用されると、ほとんどの会話はそこで一応の終止符が打たれるのである。

上京してしばらく経った頃、かつて宮崎市の学生寮で共に過ごした友人と会う機会があった。彼女は、首都圏の人々と会話をしている「ダカラヨ」が通じず、それに代わる適切な言葉が見つからないため困惑すると話していた。それを聞いて、宮崎市民の会話における「ダカラヨ」類の使用について意識するようになったことが、本研究をするに至った動機である。

一・二、研究目的

早野(二〇〇八)では、宮崎県方言の「相手に同意してあいづちをするときの表現」として、「ジャツド類(ジャツド・ジャツドジャツド)」、「ジャガ類(ジャガ・ジャガジャガ)」、「ジャツジャツ」を挙げている。そして、若年層ではそれらに代わって「ジャカイヨ」、「ダカラヨ」が使われ始めていることを指摘している。

しかし、私は宮崎市での三年間の高校生活を通し、この類のあいづちには他にも「ダカイヨ」、「ヤカイヨネ」など、様々なバリエーションが

あり、しかもそれらは「使われ始めている」というより「一般的に使われている」というべき頻度で使用されていることを実感していた。そこで、本研究は宮崎県日向方言における、若年層の「ジャカイヨ」、「ダカラヨ」をはじめとするあいづち表現の使用状況やその使い分けと、断定辞の使用状況について調査し、考察することを目的とする。

二、先行研究

二・一、宮崎方言の分類

まず、本研究で扱う宮崎方言の区画を明らかにしておく。区画図からも分かるように、宮崎方言は「諸県方言」と「日向方言」の大きく二つに分類されている。本研究のアンケート調査の対象となるのは、主に宮崎市の住民であるので、「日向方言」の調査となる。

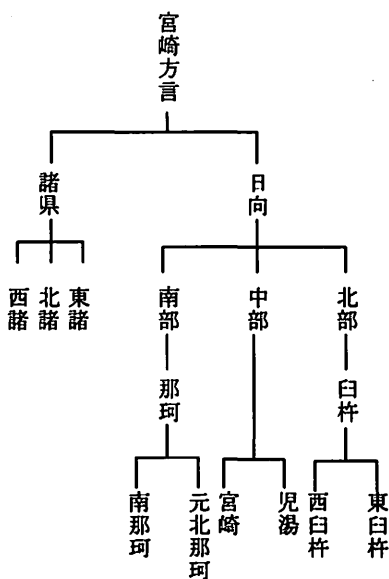


図1【宮崎方言の区画図】

二・二、宮崎方言における断定辞

二・二・一、宮崎方言における断定辞の変化
まず、岩本(一九八三)から、本研究に関連があると思われる宮崎方言における助動詞について述べられた箇所を引用する。

断定表現には、チャ(ジャ)を使うが、日向の中部以南や諸県ではヤも使われている。チャは促音に続く場合にはチャと清音化する。見タトチャガを見タツチャガのように言う。

(中略) 推量表現は、一般にチャローを使うが、古語「らむ」に由来するドーやヤローも広く使われている。また、古語「つらむ」に由来するツローが北部で使われ、チャと合しチャツツローとなる。ラシーも稀に使われる。意思表現の助動詞はウのみであり、ウは動詞の語尾と融合し、一体的に表現されることが多い。

否定表現にはンを用い、ズ・ン・ネの活用形がある。助詞ニに続いたズニは、ジ(ー)に約転して用いられることが多く、またアツタに続いたズアツタはザツタと約言され、否定の過去形となる。本来、日向は行カザツタのように言い、諸県は行カンチャツタのようにいう。しかし、新しい行カンカツタが中部以南の老年層にも現れてきており、年少者はほとんどこの言い方である。諸県でも行カンカツタに移行しつつある。

岸江(一九九六)では、宮崎方言にみられる新語・新形式のパターンとして、地元で発生したものと外部から影響されたものの二通りを挙げている。そして、それらのいずれとも判断しがたいものとして、断定辞の「ヤ」について触れている。岸江氏は、九州方言研究会『九州方言の基礎的研究』(一九六九)の調査結果において、福岡・長崎・鹿児島県の老年層でわずかにみられたヤが、少年層ではこれらの県でジャをすでに凌駕して優位に立ったことに加え、同時に少年層図では、ヤがほぼ九州全県(宮崎県でもこの当時、鹿児島寄り2地点にヤが認められた)に認められたことから、九州地方のヤは、九州の北と南から広がり、現在では宮崎県を含む九州全域で若年層主流形式となったと述べている。

さらに岸江氏は九州北部あたりが、この地方で独自に発生したもののなか、関西中央部からもたらされたものなのかという問題について、一般的にジャの響きに比べてより柔らかい響きを持つと思われるヤに移行しようとする意図は、関西中央部とは無関係に九州北部あたりでも特に若い女性に起こり得たことが想像できるし、決して蓋然性が少なかつたわけでもなかったと説明している。

一方岸江氏は、陣内・坪内が行った「福岡では、世代が下がるほど、関西や関西弁に対する評価が上昇している」という指摘をもとに、宮崎においても独自の調査を行い、この点を明らかにした。岸江氏の調査の結果によると、壮年層では、関西弁よりも東京弁に対する好感度が高かったのだが、これに対し若年層では、関西弁に対する好感度が圧倒的に高かった。この結果によつて明確な結論付けはなされていないが、言語面での若年層の関西志向がより強まっていくことが考えられると指摘している。

陣内(一九九六a)では、九州・山陽の若年層に対してアンケート調査を行い、断定辞の使用率を調べ、その地域的特徴を述べている。

調査の結果、従来山陽・九州の断定辞は、ジャであったが、現在(一九九五年)の若年層においては、ジャ優勢域、ヤ優勢域、それにダ優勢域の3つに分かれており、山口西部を除く山陽域はジャ、熊本、鹿児島を除いた九州の大部分と、山口西部がヤ、熊本・鹿児島がダという比較的まとまりのある連続した分布相となっていることが明らかになった。また、ヤ優勢域では、中心城市ほど「ジャ」から「ヤ」への変化が早く、都市から離れるほど従来の「ジャ」が残っているというのが一般的である(ただし島嶼部では独自の变化か海上交通による伝播か不明だが、「ヤ」への変化が割合早いところも多い)としている。

また、断定辞「ヤ」の普及について、地方共通語化という言葉を用いて説明している。

陣内氏は、地方共通語化をある方言形や方言用法の広域化と定義し、関西方言を含む西日本方言の地方共通語化のタイプは次の四つに分けている。

- (1) 全国共通語化によるもの
- (2) 東京方言によるもの
- (3) 関西方言によるもの
- (4) 地方中核都市方言によるもの

そして、関西方言化が地方中核都市を経由して行われる場合、その地方共通語化のタイプは(3)と(4)のいずれとするべきかという問題について、先述の調査における、断定辞「ヤ」の地元意識によつて一応の結論付けを行っている。この地元意識の調査とは「ヤ」がどの程度地元化し

ているかということ、もし地元意識がない場合、それをどの地域の言い方として捉えているかを問うたものである。この結果によると、福岡に隣接する山口東や熊本では「福岡のことば」という意識が圧倒的であることから、この地域での「ヤ」への変化は関西方言化というより福岡方言化とする方が適当であるとしている。しかしながら、人々の意識によって方言のルーツを結論付けることができるのかということ、宮崎県をはじめとする「ヤ」の地元意識が高い地域のそれはどう扱うのかという点で疑問は残る。

二・二・二 断定辞とあいづち表現の関係性

太田(一九九八)では、あいづちの新語形として「ダカラヨ」を挙げている。

(前略)さらに最近では「ダカラヨ」という語形があいづちとして使用され、特に若年層ではかなり広がっている。この語形もあいづちの「デスヨ」「ダヨ」同様に共通語形への翻訳から発生したのだろうが、用法が共通語とは異なる。このあいづちの用法では「ダ(高)カラヨ(低)」と「ダ(低)カラ(高)ヨ(低)」のように一定の音調を伴って発音され、その意味は「ほんとにそうだよね」といった単なるあいづちの意味しか持たない。

太田(一九九八)は、鹿児島では「…言ったでしょう」(断定+順接)と言うときに、断定辞が絡んで「ジャツデ」「ヤツデ」「ダカラ」の語形が主に使用されており、特に近年若年層では「ダカラ」が圧倒的優勢であると述べている。さらに、この「ジャツデ」「ヤツデ」については、「ジャツデヨ」「ヤツデヨ」という形で以前からあいづちとしても使用されており、これらの例に従って、「ダカラヨ」という新語形が発生したとしている。

加藤(一九九五)では、一般的に順接の接続詞として理解されている「ダカラ」の、話し言葉における変則的な用法について述べている。

そもそも「だから」という表現形式は、「それで」や「その結果」

などと違い、「原因→結果」の関係というよりも、「前提→帰結」の関係を構成するものであり、そのことの必然として、「だから」表現には、後件の成立を妥当なものとする姿勢が宿ることになる。そして、話者が白らの「言わんとすること」を「だから」表現を使って述べている場合、そこには、白らの「言わんとすること」を理解され受け入れられていはずのものとして相手に提示しようとする話者の意図が潜むことになる。

(中略)すなわち、「白らの「言わんとすること」は「理解され受け入れられていはずだ」とする「だから」表現の「主體的・情意的側面」だけが突出し、その前後の論理的な関係を表示するという「対象的・論理的側面」が欠落してしまったものが変則的な「だから」なのである。

本研究で取り扱う宮崎方言の「ダカラヨ」のダカラは、前後の論理的な関係を持たない一種のあいづち表現として用いられることから、加藤の言う「変則的なダカラ」と捉えることができるのではないであろうか。岸江(一九九八)では、宮崎県と鹿児島県において、断定辞とあいづち表現に深い関連があることが述べられている。

岸江氏は、鹿児島市・宮崎市の断定辞「雨だった」の野線部分について、両都市で調査を行った。その結果、六〇代以上では「ジャツタ」が鹿児島市でおよそ七〇%、宮崎市で六〇%以上使用されていた。しかし、中高生においては鹿児島市で「ダツタ」がおよそ九〇%使用されている一方、宮崎市では「ヤツタ」が同じくおよそ九〇%と、「ジャツタ」がほとんど使用されなくなるのに伴い、鹿児島市は「ダツタ」、宮崎市では「ヤツタ」と、両県の断定辞に明確な違いが現れたのである。

また岸江氏は、このことと、鹿児島市の若年層を中心に用いられる相づち「ダヨ」との関連について述べている。この形式は断定辞が「ダ」である鹿児島市で共通語翻訳の結果生じた中間言語であって、この変換プロセスの決め手は断定辞が共通語と同形の「ダ」であることであるので、断定辞が「ヤ」である宮崎市で「ダヨ」が用いられることはないとしている。

しかし、「宮崎市内では断定辞が「ヤ」で、「ダヨ」が用いられることはな

い」とするならば、なぜ「ダカラヨ」は使用されるようになったのであろうか。

小西(二〇〇〇)では、「共通語・東京方言でダカラと訳することができ、かつ、語構成が(指示語十)指定辞終止形十順接確定条件を表す接続助詞)のものを、「だから」相当形式と呼ぶ」として、三つの談話資料において、どのようなダカラ相当形式が使用されているか、またそれらに加藤(一九九五)などが指摘した(理由―帰結)用法・非(理由―帰結)用法が認められるかどうかを検証している。使用された談話資料は次の三つである。

- ・『全国方言資料』(一九六六―六七) 日本放送出版協会
- ・『方言談話資料』(一九七九―八〇) 国立国語研究所
- ・『関西・若年層における談話データ集』(真田信治・井上文子・高木千恵 一九九九)

小西(二〇〇〇)は、これらの談話資料の検証により、非(理由―帰結)用法のダカラが(指定辞十接続助詞)という構成要素への分解が不可能な意味・機能を有していることと、関西方言の従来形にこの用法がなかったことが、指定辞ヤを保持したままダカラを一語として受容した一因と考えられると述べている。

小西氏の検証に基づき、本研究で取り扱う宮崎方言の「ダカラヨ」が非(理由―帰結)用法のダカラであると仮定すると、断定辞が「ダ」である鹿児島県から、その断定辞自体の影響はあまり受けず、断定辞「ヤ」を保持したまま、あいづち表現「ダカラヨ」を受容したと推測できる。

二・三・宮崎方言における相づち表現の推移

早野(二〇〇八)では、宮崎大学国語学研究室が二〇〇五年四月から二〇〇六年十二月にかけて行った方言調査の結果をもとに、宮崎県の言語動態について述べている。

早野氏の調査によると、相手に同意してあいづちするときの表現として、宮崎県南部域ではジャツド類(ジャツド・ジャツドジャツド)・ジャガ類(ジャガ・ジャガジャガ)・ジャツジャツなどが使われており、日向方言域ではジャガ類、諸県方言域ではジャツド類が主に使われている。しかしその一方若年層において、日向方言域、諸県方言域ともにジ

ヤカイヨとダカラヨ、そしてその中間形のダカイヨが使われ出していることも分かった。さらに早野氏はこのダカラヨについて、ジャカイヨのジャカイを標準語形に翻訳した形であると説明している。

三・研究方法

宮崎県宮崎市の中学生に対するアンケート調査
アンケート実施日 二〇一〇年一〇月一日
調査対象 中学生三六名、高校一年生六四名、二年生五二名、三年生三〇名、計一八二名

実際のアンケート回収数は二〇〇を上回っていたが、それが最終的に一八二人になったのは、高校の先生方の判断により、個人情報書かれず、性別や出身地など、方言を考察する上で重要だと思われる情報が得られなかった数を除いたためである。また、アンケート結果において、インフォーマントの総数にずれが生じているのは、一・においては複数の選択肢について使用すると答えた者がいた為であり、二・については、全て同じ答えを選択している者、回答のほとんどがあいづちの類に入らないと判断した者の数を除いたためである。

四・調査結果

四・一・断定辞の使用状況

四・一・一・断定辞「ジャ」「ヤ」「ダ」の使用状況
一・の問いは、主に断定辞「ジャ」「ヤ」「ダ」の使用状況を見られたものである。各問における回答状況を一つ一つ見ていきたい。

問1「昨日は雨 ジャッタ/ヤッタ/ダッタ」

「過去肯定」の断定辞の使用は、「ヤ」に偏っている。全体の八三%が「ヤ」を使用しており、かつて圧倒的勢力を持っていた「ジャ」(九州方言学会『九州方言の基礎的研究』一九六九)は、わずか七%しか使用が見られなかった。

問2「明日は雨 ジャケン/ヤケン/ヤカラ/ヤカイ/ダカラ/ダカ

イ 山登りは中止にしよう。」
順接の確定条件で原因・理由を表す接続表現は、「ヤカラ」、「ヤカイ」

に使用が偏っている。それぞれ三七%、四七%で、これだけでも合わせて八四%、さらに「ヤケン」の八%を合わせると実に九二%もの人が「ヤ」を使用していることになる。「ダカラ」は全体の十%と少数であったが、中学生の使用率が他に比べ高かったことから、これから若年層を中心にさらに広く使用される可能性がある。

問3 「ジャケン／ヤケン／ヤカラ／ヤカイ／ダカラ／ダカイ 言ったでしょう。」

「示唆」の接続表現は、2. とは違い、「ダカイ・ダカラ」の使用が圧倒的に多い。「ダカイ」が三七%、「ダカラ」で三二%、三番目に使用率の高い「ヤカイ」が十八%ということを見みると、その使用率がいかに高いかが分かるだろう。「ジャカイ」の使用も全体の五%見られたが、中学生には使用した者はいなかった。

問4 「小雨ぐらいなら明日の花火大会は あっジャロ／あるヤロ／あつとダロ／あつチャロ／あるダロー。」

「推量」の助動詞は、年齢、性別に関係なく、「ヤロ」が圧倒的に使用されている。その使用率は九二%に及び、陣内（一九九五）による調査におけるそれが七十%であったことから考えると、この十五年間で「ヤ」の勢力が一層強まったことが分かる。

問5 「ほら、そこにあるジャロ／あるヤロ／あるダロ／あるヤン／あるジャン。」

「強意指示」の断定辞は、「ヤン」五十二%、「ヤロ」三二%と、「ヤ」の使用が多いが、「ジャン」の使用率が十六%と、他の項目に比べ東京語の影響を大きく受けていると思われる。

問6 「昨日日本屋に行った ジャケド／ンヤケド／ンダケド／ツチャケド／ツチャケン 閉まっていた。」

「逆接」の確定条件を表す接続表現は、「ジャ」、「ヤ」、「ダ」に分類されない「チャケド」、「チャケン」の使用率が高かった。それぞれ四八%、二三%を占め、「ヤケン」の十五%に大きく差をつけている。

問7 「天気悪いし、今日の水泳大会は中止かな。」

「そう ジャロ／ヤロ／ダロ／ヤ ね。」

「ダロ」は、東京語では「推量」の助動詞「ダロウ」の変形形として使用されているが、宮崎市ではそれに代わって、「ヤロ」の使用率が

五二%を占めている。「ダロ」を選択した者は全体の三%しかいなかった。また、推量とは意味が離れてしまいが、二. においてA以外のあいつちとして使用率が高かった「ソウヤネ」も、四四%の人が選択した。

問8 「そういえば宿題の提出今日までだよな。」

「言われてはつと気付いて」 ジャッタ／ジャーヨ／ヤッタ／ダッタ

この問いは、他の項目との傾向の違いが特に顕著に現れた。「はつと気付かされたときに出る言葉」として、「ジャッタ」を使用する者が五四%、実に半数以上の人が使用している。一方「ヤッタ」はそれに続いて使用率が高いものの、三二%と、圧倒的勢力を見せた他項目とは違って三割の使用率に留まっている。「ジャ」に代わって勢力を伸ばしている「ヤ」の使用率が「ジャ」のそれを下回った唯一の例である。

問9 「あれ、次の授業何 ジャッタ／ヤッタ／ダッタ／ダ っけ。」

断定の助動詞+終助詞「ケ」の形式で、東京語で、何かを確認したり、思い出したりするとき用いる「何ダツケ」の「ダ」は、日向方言では「ヤッタ」に置き換わる。その使用率は七四%と圧倒的である。かといって、「ジャッタ」、「ダッタ」の使用率はそれぞれ一%とほとんど使用されていない。この用法で使われるのは「ヤッタ」に限られており、それを使用しない者は東京語と同じ「何ダツケ」の形を使用していると言っているだろう。

問10 「昨日の夕方バス停の前には ジャロ／ヤロ／ダロ／デシヨ」

問11 「昨日の夕方バス停の前におった ジャロ／ヤロ／ダロ／デシヨ」

相手に確認や同意を求める気持を表わす助動詞「ダロ」が、直前の動詞「いた」（東京語）と「おった」（日向方言）とで、何らかの変化を示すのかをみるために設けた問いであるが、両者にほとんど使い分けは見られなかった。性別、年齢に関わりなく、ほぼ全員が「ヤロ」を使用すると回答した。

四・一・二. 断定辞の使用における男女差

各問における全体の回答傾向は以上の通りであるが、次に断定辞の使用における男女差をみていきたい。

まず、男子に比べ女子の方が断定辞「ダ」の使用率が高いという傾向が見られた。過去完了の「ダッタ」は男子でわずかに七%であるのに対し女子は一三%、さらに接続詞の「ダカラ」で男子二二%に対し女子が四〇%など、男子の二倍近くの使用率を示すものもみられた。特に、問5の「ほら、そこにあるジャン」の「ジャン」は典型的な東京語であるが、これも男子の一〇%に対し女子は二二%で、「ヤロ」の二六%にせまる使用率であった。

この傾向がみられる原因としては、鹿児島方言の影響が考えられる。鹿児島方言は、断定の「ジャ」は「ヤ」ではなく「ダ」に移行した。つまり、ほとんど東京語と変わらない断定辞が使用されているのである。鹿児島県に隣接する都城市などではこの影響を強く受けていて、断定辞に「ダ」を使用する人が大半を占めている。つまり、鹿児島ないし都城市などから来ている友人や先生などの影響を受けて、断定辞に「ダ」を使用するようになった人はいないかと考えられる。先にも述べたとおり、私は高校に入学する際、宮崎県北部にあたる日向市から宮崎市に転居して寮生活を始めたのだが、そこで知り合った都城市出身の友人に、「すごく訛ってるね」と笑われ、最初の頃は自分自身の日向方言の使用をとて気になっていたという記憶がある。宮崎方言が恥ずかしいかどうかは別にしても、同じ県民から「訛ってる」と言われると、東京都民から言われるよりも一層気になってしまうものである。男子に比べ女子はグループ意識が高く、会話によるコミュニケーションも盛んなため、意識して「ダ」を使用するようになった者がいたとしても不思議ではない。

他に考えられるのは、やはり流行に敏感な女子に特有の、都会への憧れではないかと思う。ファッションやテレビドラマなどの話題が尽きない女子高生が、好きなモデルや女優の使う言葉や言い回しを模倣し、それが定着することは珍しくない。ただ、先に述べた原因に比べると、影響力は少し弱いようにも思われる。

次に、総数こそ少ないものの、男子の方が「ジャ」の残存率が高いということである。過去完了の助動詞において、女子の「ジャッタ」の使用

率は三%であるのに対し、男子は九%、推量では女子に全く使用がみられなかったのに対し、四%の使用がみられた。また、接続詞の「ジャカイ」は女子の使用率三%に対し男子は七%であった。断定辞の「ジャ」の使用は現在ごくわずかで、男子の使用も非常にわずかなものであったが、女子の使用率が男子のそれを上回ることにはなかった。ただ、先にも述べたように問8に対する「ジャ」の使用率は他に比べ圧倒的に高く、女子でも四七%、男子においては実に六一%であった。女子の使用率が低かった理由として、先に挙げた鹿児島方言や東京語の影響が考えられる。というのも、この問に関し、女子の「ダッタ」の使用率が一一%と、男子の六%に比べ高い数値であった。つまり「言われてはつと気付いて」発する言葉として「ジャッタ」は根強く残っているものの、やはり断定辞「ジャ」から「ヤ」への移行や、東京語の影響を少なからず受けているということである。

また、数こそ少ないものの、意外だったのが問10、11の結果である。この二問はそもそも東京語「く」にいた「く」に接続する場合と、方言「く」におった「く」に接続する場合とで断定辞に違いが出るかどうかを検証する為に設けたものである。残念ながら東京語と方言との間に使い分けは見られなかったが、男子の「デショ」の使用率に注目してほしい。女子が四%、二%であるのに対し、男子は八%、七%とそれを上回っている。このような女性的な言い回しが男子にも使われるようになったのも、東京語の影響などによる近年の傾向だと思われる。

四・一・三 断定辞の使用に関するまとめ

本アンケート調査によって断定辞の使用について明らかにしたことをここでまとめておきたい。

岩本(一九八三)をはじめとする先行研究に述べられてきたように、宮崎県における断定辞の「ジャ」から「ヤ」へ移行は、結果からみても明らか事実であった。岸江(一九九六)はその変化を「現在進行中」と表現していたが、今回の調査結果によれば、若年層においてはその移行は既に完了したとみて良いと思う。女子に比べ男子の使用率が高いことは述べたが、総数からみるとそれもかなり少数であるし、男女共に使用率が0%というのも見られた。ただやはり、問8「言われてはつと気

付いて「使用する「ジャッタ」に関しては、偶然とは考えにくい使用率の高さであった。若年層において唯一この「ジャッタ」が根強く残っている理由は明らかではないが、設問のように、無意識に発せられることが多いという認識から、いわば感動詞のような機能をもっているのではないかと考えられる。感動詞は助動詞に比べ文脈や時制などの影響が少ないため、陣内（一九九五）がいう地方共通語化の影響も受け難かったのではないだろうか。だが、他の用法における断定辞がほぼ「ヤ」に移行したことを鑑みると、今後この「ジャッタ」の使用率も徐々に低下していくであろうことが予想される。

また、岩本（一九八三）で説明されている、促音に続く「チャ」（本アンケートでは「ジャ」と表記）の清音化であるが、問6の回答で、現在もその傾向にあることが窺えた。東京語では「行つたんダケド」と撥音+ダケドの形が使用されるのが一般的であるが、「ツチャケド」が四八%、「ツチャケン」が二三%と、両者を合わせると七割を超える圧倒的な使用率であった。ただ、これらに続いて「ンヤケド」の使用率が一五%となつてゐる。残念ながら比較資料が見当たらなかった為、これが拡大しているのかどうかは今のところ明らかではないが、ここ三〇年ほどの急速な「ヤ」の普及と、今後一層増すであろう東京語の影響を考えると、「チャ」の使用が減少していくことも予想される。

四・二・二 あいづち表現の使用状況

四・二・二・一 あいづち表現の分類と、考察の観点

前述のとおり、早野（二〇〇八）は、ダカラヨとジャカイヨの中間形としてダカイヨの存在を挙げていたが、自身の調査結果より、他にもこの類とみられるあいづち表現が使用されていることが明らかになった。ジャカラヨ、ジャカイヨ、ダカラヨ、ダカイヨ、ヤカラヨ、ヤカイヨの六つと、これらの「ヨ」が「ヨネ」に置き換わったもの六つを足して、計一二種類の使用が認められた。

本稿では、便宜上、以上の一二種類のあいづち表現をAと表すこととする。さらに、Aにおいて、頭に「ジャ」がつくものをジャ系、「ダ」がつくものをダ系、そして「ヤ」がつくものをヤ系と分類し、同じようにして「カラ」と「カイ」、「ヨ」と「ヨネ」も分類する。これらの分類

を分かりやすくまとめたものが、図2である。
このように一二種類のあいづち表現とその分類を示した上で、宮崎県日向方言の日常会話において、Aとその他のあいづち表現の間にどのような使い分けが見られるのか、また、Aの中でもジャ系・ダ系・ヤ系さらにカラ系・カイ系等でその使用に何らかの傾向が見られるのかを考察する。

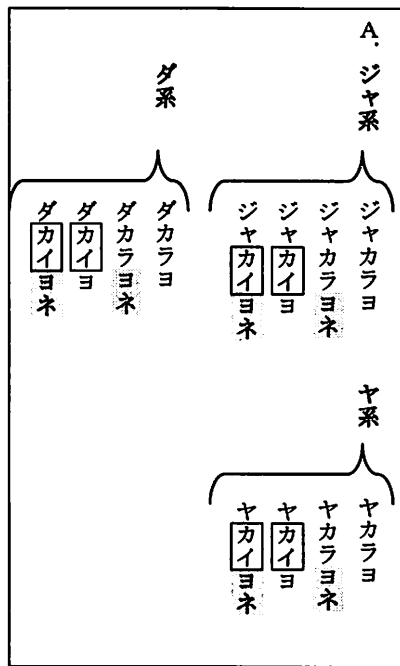


図2【Aの分類】

二. については、宮崎日向方言のあいづちについて、①性別、②同意の程度、③否定文か肯定文か、そして④東京語による発話か日向方言による発話か、以上の四つの点によってその使い分けが行われるのかどうかを考察する。また、②に関しては、同意の程度を「軽く受け流し同意する感」で、「真剣な雰囲気」で同意する感で、「ものすごく同意する感」で「の三つに分けて、設問ごとに提示している。これらを以下の考察では便宜上前から順に(a・b・c)として示す。

四・二・二・二 各問の回答状況

二.の問いは、話しかける人物とあいづちを打つ人物、二人の人物のイラストをのせ、その吹き出しに、指定された同意の程度で、かつ普段

親しい友人と話す際に使う言葉を書き込むよう指示をした。括弧内の英字が先に示した同意の程度である。

問1 「昨日のクイズ番組、面白かったこっせん？」 (a)

「ソウヤネ」の使用率が二九%で最も高い。Aの使用率は全体の半数で、「ジャカイヨ」が二%。「ダカイヨ」が一%と使用率が高い。

問2 「〇ちゃん、転校しちゃうんだって。寂しいね。」 (b)

「ソウヤネ」が使用率が二三%で、最も高い。Aの使用率は四五%で、その中で最も使用率が高かったのは「ダカラヨ」で一〇%、Aを使用した者の二二%がこれを選択している。Aの中で「ダカラヨ」が最も高い使用率を示したのは問17とこの問の二例のみである。

問3 「バス全然来ないね！」 (c)

「ジャカイヨ」の使用率が二七%で最も高い。「ジャカイヨ」だけでも約三割、Aにおいては全体の七割以上の使用率である。Aの使用率が七割を超えたのはこの例だけである。

問4 (雑誌を見ながら) 「このモデル、かわいいがね。」 (a)

「ソウヤネ」の使用率が二%で最も高い。Aの使用率は二九%で他の設問に比べると高くはない。一方、「ダヨネ」「ヤガネ」「ヤネ」がそれぞれ七%と、他に比べ高い使用率を示している。

問5 「今日の体育祭、楽しかったね！」 (c)

「ソウヤネ」の使用率が十四%で最も高い。Aの使用率は四三%で、「ジャカイヨ」について「ダカイヨ」の使用率が高かった。

問6 「最近雨ばかりで嫌になるがね。」 (a)

「ジャカイヨ」と「ダカイヨ」の使用率がそれぞれ一五%で最も高い。Aの使用率は五三%で半数を超えた。

問7 「県大会、決勝戦で負けて悔しかったね。」 (b)

「ソウヤネ」の使用率が二四%で最も高い。Aの使用率は四一%で、「ダカイヨ」の十三%が最も高い。「ダカラヨ」「ヤカラヨ」「ジャカイヨ」の使用に大きな差は見られなかった。

問8 「このハンバーグおいしいこっせん？」 (a)

「ソウヤネ」の使用率が二四%で最も高い。Aの使用率は二六%と低い。「ヤネ」九%、「ウン」十一%など、あいづちの中でも短く簡略なもの

の使用が多い他、「おいしいね」など相手の発話を繰り返す形のあいづちも多かった。

問9 「今日の数学のテスト難しかったこっせん？」 (c)

「ジャカイヨ」の使用率が二二%で最も高い。これに「ダカラヨ」と「ダカイヨ」の一四%が続く。Aの使用率は六九%で3.に次ぐ高さである。また、「ジャカイヨ」四%、「ダカイヨ」五%など、Aの「ヨネ」系の使用率が他に比べわずかではあるが高かった。

問10 「今日の花火大会、明日に延期になっちゃったね。」 (a)

「ソウヤネ」の使用率が二五%で最も高い。Aの使用率は二九%と低く、Aの中でもその使用に差や傾向は見られなかった。

問11 「図書室やとに、あん人達うるせーね。」 (c)

「ジャカイヨ」二四%が最も高く、それに「ダカイヨ」一九%、「ダカラヨ」一一%が続く。Aの使用率は六四%と高いが、「ヨネ」系の使用率は極端に低い。

問12 「明日のテストが終われば三連休だね！」 (a)

「ソウヤネ」の使用率が二四%で最も高い。それにAの中でも使用率が高い「ジャカイヨ」の一%が続く。また、「ヤネ」も一〇%と他の設問に比べ回答が多かった。「その他」の使用率が一五%と高いのは、「やったー」など喜びの表現が多種多様に見られたためである。

問13 「あの時のこと思い出すと笑いが止まらないね！」 (c)

「ジャカイヨ」の使用率が二%で最も高い。それに「ダカイヨ」の一四%、「ダカラヨ」の九%が続く。Aの使用率はちょうど六〇%と高く、Aを選択した者の三五%が「ジャカイヨ」を使用している。Aの使用率が高いのは、肯定的な発話文においては稀な例である。

問14 「そろそろ真剣に進路考えんとね。」 (b)

「ソウヤネ」の使用率が二五%で最も高いが、その他については使用率が散った。Aの使用率は三八%で、「ジャカイヨ」、「ダカイヨ」を除くと使用率に大きな差はなく、他の設問に比べ、「ヨ」系と「ヨネ」系の差も小さかった。

問15 「いきなり雨降ってきたっちゃけど！」 (c)

「ジャカイヨ」の二六%、「ダカイヨ」の一五%に大きく偏った。Aの

使用率は六七%で、前設問中二番目に高かった。「ヨ」系の使用が多く、「ヨネ」系の使用率と大きく差が開いた。「その他」の使用率が一八%と高いが、これは「ありえん」「まじないわ」など、多種多様の否定的な答えが多かったためである。

問16 「暇になっちゃったね。何しよつか。」(a)
 「ソウヤネ」の使用率が三七%で最も高い。その次にまた相手に意見を促す「ナニスル」一〇%が続いた。Aの使用率は一三%と一八の設問中最も低い。話し手に何らかの意見を求められた場合でも、Aの使用が認められることが分かった。

問17 「○○ちゃん元気がないね。悩み事でもあるのかな。」(b)
 「ソウヤネ」の使用率が三〇%で最も高い。また、他の設問ではほとんど選択されなかった「ソウダネ」を選択した者が六%の一〇人いた。Aの使用率は二一%と低い。Aの中で最も使用率が高かったのは「ダカラヨ」で、これは少ない例の一つである。「その他」の使用率が二四%と高いが、これは「気にしなんな」「どうなんだろね」など多種多様な回答が得られたためである。

問18 「○○ちゃんはいいつも勉強頑張ってますよいよね。」(a)
 「ジャカイヨ」の一九%が最も高い。それに「ダカイヨ」一三%、「ソウヤネ」九%が続く。Aの使用率は四六%で、Aを使用した者のおよそ四〇%が「ジャカイヨ」を選択している。また、他の設問ではほとんど使用が認められなかった「ダヨネ」の使用率が八%で、一三名が回答した。これは一八の設問中最も多い。

四・二・三、観点別にみたあいづちの使い分けの傾向

以上、各設問の回答における大まかな傾向を述べた。では、先に挙げた①性別、②同意の程度、③否定文か肯定文か、そして④東京語による発話か、方言による発話か、の四つの観点から、「ジャカイヨ」をはじめとするAの役割ないし使い分けの傾向について考察していきたい。

① 性別

図3・1は、問1から問18の各回答をジャ系、ダ系、ヤ系に分け、

その割合を示したものである。グラフの中に書かれた数字が、実際の回答者の数である。

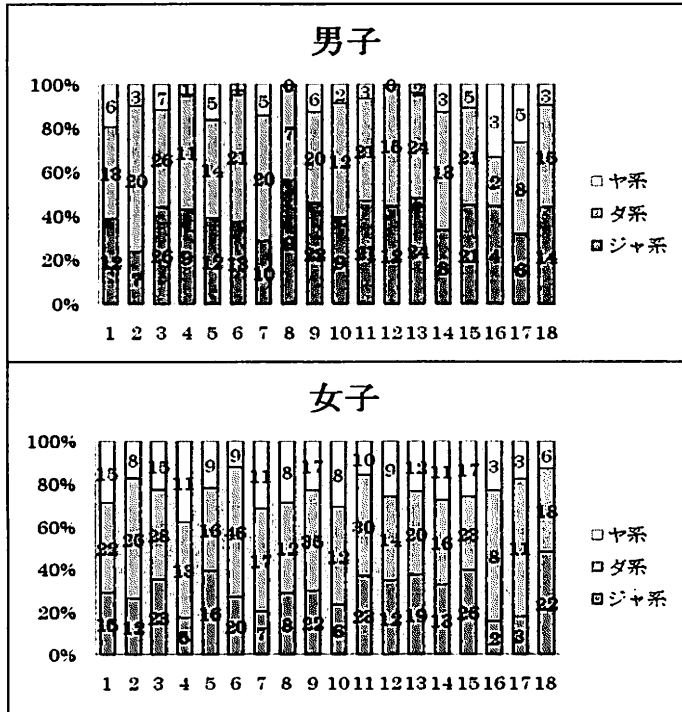


図3-1【ジャ系・ダ系・ヤ系の使用率】

まず、男子のグラフを見てもらいたい。男子のAの使用においては、ジャ系とダ系の使用率がほぼ拮抗しているということが分かる。ヤ系の使用は、Aを使用した者の総数自体が極端に少ない問いを除くと二〇%を超える使用率は見られない。一方女子は、ダ系がジャ系に差をつけて、使用率が高いことが分かる。ダ系に関してはほとんどの問いで使用率が四〇%を超えており、五〇%を超えたものも四例見られた。ジャ系はダ系に続く使用率の高さであるが、問題によってはヤ系がそれを上回る例

も見られた。ヤ系の使用率は男子に比べると高く、大体が二〇〜三〇%の間で推移している。
 図3・2は、同じようにして男女別にカイ系・カラ系の使用状況をグラフにしたものである。

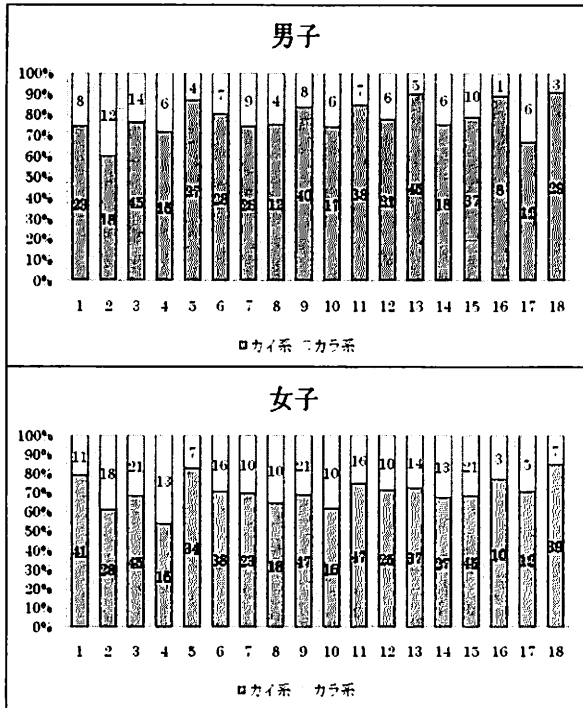


図3-2【カイ系・カラ系の使用率】

グラフを見ると、男子に比べ、女子のカラ系の使用率が高いことが分かる。男子のカラ系の使用率は全体の回答数が極端に少ないものを除くとおよそ二〇〜三〇%の間で推移しているが、女子は三〇〜四〇%を占めているものが多い。このことから同時に、男子の方がカイ系の使用率が高いとも言える。
 図3・3は、ヨネ系の使用率の男女比である。ヨネ系の使用率は、男女共に高くはなかった。しかし、男子はおよそ一〇〜二〇%で推移しているのに対し、女子は二〇〜三〇%で推移している。問いによって使

用率に差がみられるが、これは同意の程度など他の要素の影響が大きいと考えられる。

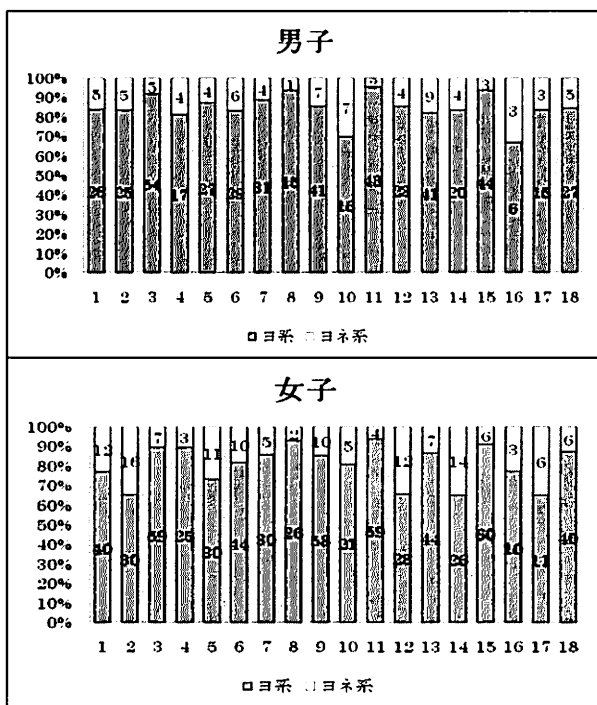


図3-3【ヨネ系・ヨネ系の使用率】

②同意の程度
 同意の程度によるAの使い分けの傾向は、先に述べた二つの観点における結果よりもさらに顕著であった。図4・1は、各問の同意の程度と、その回答におけるAの使用率を表したものである。つまり、問1の同意の程度は「軽く受け流し同意する感じ」で、この回答としてAに分類されるあいづちを使った人が全体のおよそ四九%であったということである。
 使用率が高い順に、七四%、六九%、六七%、六四%、六〇%、と上位五つが全て同意の程度がc、つまり「ものすごく同意する感じ」であった。同意の程度別にAの使用率の平均をとると、aは三四%、bは

三七%であったのに対し、cは六〇%とその差は明らかであった。つまり、宮崎日向方言におけるAのあいづちは、同意の程度が強い方が使われやすいということがいえる。

さらに、図4-2は、同意の程度と、Aをあいづちとして使用した人がさらに「ジャ」系、「ダ系」、「ヤ系」どれを選択したかを示したものである。ここで特に注目したいのが、「ジャ」系の使用率である。同意の程度がcの間における「ジャ」系の使用率は、問18で最も高い四六%、一番低いものでも三八%である。問8(同意の程度はa)の三九%の一例を除くと、「ジャ」系の使用率が高い上位八つの中に、同意の程度がcである問七つ全てが含まれる結果になった。つまり、会話における同意の程度が強いほど、Aの特に「ジャ」系の使用率が高まるといえるのである。

では、同じ同意の程度におけるAの使用率の違いは一体どこからくるのであろうか。次の項目でさらに考察したい。

③ 否定文か肯定文か

まず、問14及び問16は否定的にも肯定的にも分類されないの、この観点における考察の対象からは外すことを断っておきたい。

図5は、②と同じく、設問文に対する回答としてAを使用した人の割合と、その設問文が否定文であったか、肯定文であったかを示すものである(否定文は「否」、肯定文は「肯」、どちらとも判別がつかないものは「—」と表示している)。

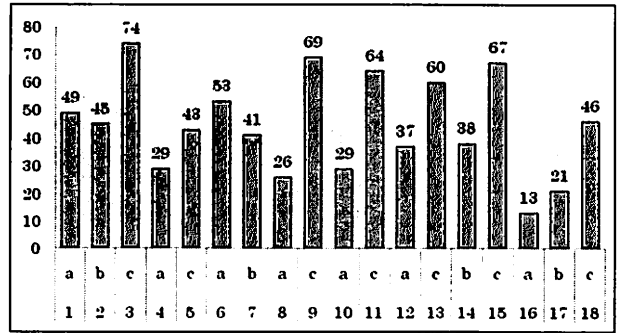


図4-1【同意の程度による使用率の違い】

は「—」と表示している)。Aの使用率が最も高かった問3の七四%を筆頭に、上位四つまでがすべて否定的な文であった。しかし、必ずしも否定的な文においてのみAの使用率が高くなるわけではなく、使用率が三〇%に満たないものもみられた。否定的・肯定的、それぞれの平均をとると前者は五一%、後者は四一%であった。したがって、②同意の程度に比べるとその影響は弱いもの、Aに分類されるあいづちは、肯定的な会話より否定的な会話の中で使われやすいということがいえる。また、集計結果からみて、②と③の結果には相対的關係があると考えられるため、これらに関する後は後述する。

④ 東京語による発話か、日向方言による発話か

図6は、Aの使用率のグラフを、その発話が東京語によるものか日向方言によるものかで分類して表示したものである。Aの使用率が最も高かったのは問3の七四%で、東京語による発話であった。しかし、その他のAの使用率が六〇%を超える四つは、全て日向方言による発話であ

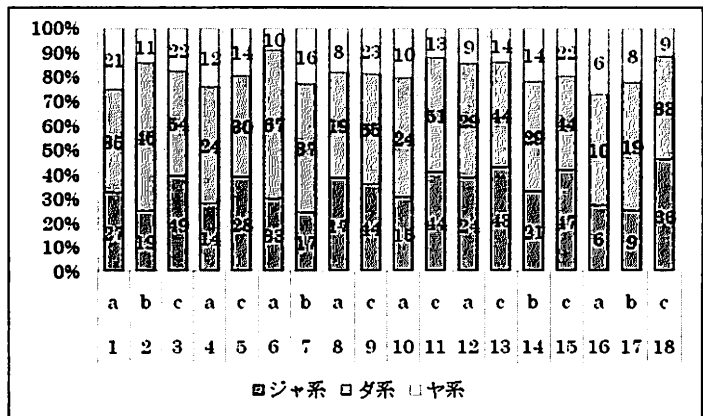


図4-2【同意の程度によるジャ系・ダ系・ヤ系の使用率の違い】

った。

Aの使用率の平均をそれぞ
れ取ると、東京語の場合が三
九%、日向方言の場合が五一
%という結果になった。ただ、東
京語による発話であっても、七
〇%を超える使用率が見られ
たことや、二〇%から五〇%程
度の使用率では、その発話が東
京語か日向方言かによる差が
全く見られなかったことから、
これらがAの使用に及ぼす効
果は、②、③に比べると弱いと
考えられる。

四・二・四、あいつち表現に関
するまとめ

四・二では、宮崎県日向方言
を使用する若年層において、ど
ういったあいつちが使用され
ているのか、特にAに分類されるあいつちはいかなる場面で使用され
それぞれどのような使い分けがなされているのか、ということを中心
考察してきた。アンケート調査の結果、本研究の要となるAは、少なく
とも宮崎市の若年層において、多用されていることが明らかとなり、さ
らに、その使用の頻度に関して、性別や同意の程度など、様々な要因
によって左右されることも分かった。四・二・三で、五つの観点からA
の使用率、さらにAを細かく分類しその使用率についても検証したが、
筆者はその中でも特に「同意の程度」と「否定文か肯定文か」の二つの
要因の影響力が大きいと考えた。

その根拠となるのが図7である。これは各問におけるAの使用率を表
したもので、横軸にはその問の「同意の程度」と「否定文か肯定文か」
の二つの要因を表示している。

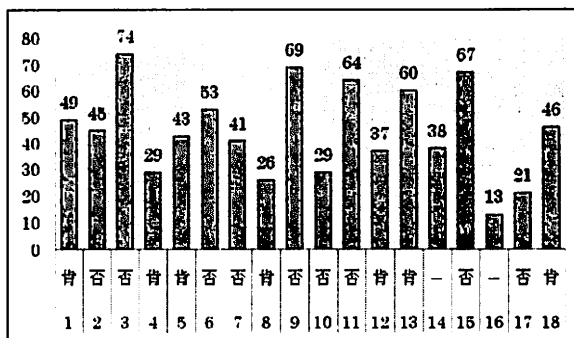


図5【否定文か肯定文かによる使用率の違い】

Aの使用率が高いもの
のから、七四%・六
九%・六七%・六四
%と上位四つまで全て
「同意の程度」がc、
つまり「ものすごく同
意する感じ」で、発
話文は「否定的」の組
み合わせである。前に
述べたように発話が否
定的か肯定的かという
のは、同意の程度に比
べると、あいつちの使
用に対する影響力は弱
い。したがって、同意
の低い場合、否定的で
あっても肯定的であつ
ても、Aの使用自体に
は大きな変化はみられ
ない。しかし、同意の
程度が高いとき、その
発話が否定的であるという条件が重なることによって、Aの使用率が格
段に高くなるのである。

五、まとめ

これまで、若年層における宮崎県日向方言の助動詞とあいつち表現の
使用の関係性について述べてきた。本調査によって考えられることを以
下にまとめる。

早野(二〇〇八)は、「ダカラヨ」について、「ダカラヨは、ジャカイ
ヨのジャカイを標準語形に翻訳した形である」と述べていたが、太田(一
九九八)に述べられているように、「ダカラヨ」というあいつちの新語
形がまず鹿児島県に発生し、そのままの形で宮崎県に伝わったと考える

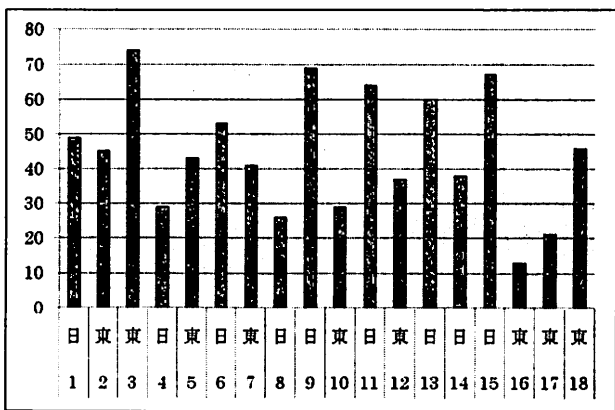


図6【東京語による発話か、日向方言による発話か

によるAの使用率の違い】

方が妥当であるように思われる。その根拠は、鹿児島県に隣接する都城市では主に使用されている断定辞が「ダ」で、鹿児島県と一致している為に、「ダカラヨ」を受容するのに抵抗がなかったと予想出来るからである。しかし、宮崎県で主に使用されている断定辞は「ヤ」で、「ダ」が使用されている地域は鹿児島県寄りの一部に限られている。ではなぜ、断定辞「ダ」の勢力が及んでいない宮崎市民などにも「ダカラヨ」はここまで受け入れられたのだろうか。

その理由付けとなるのは、小西(二〇〇〇)の研究である。つまり、鹿児島県からもたらされた「ダカラヨ」は、あいつち表現として使用される非(理由―帰結)用法のダカラであり、このため断定辞に「ヤ」を使用する宮崎県の多くの地域の住民(特に若年層)にも受容され得たのである。「ジャカイヨ」・「ダカイヨ」などが存在するのは、従来から宮崎方言として存在する接続表現「ジャカイ」(東京語における「ダカラ」)などによって、むしろ宮崎方言に転用された結果ではないだろうか。「ヤカイヨ」が「ジャカイヨ」「ダカイヨ」に比べ使用率が低かったのは、これらの表現によくやく宮崎県の主な断定辞である「ヤ」の影響が現れてきたためと考える。

また、太田(一九九八)は、「ダカラヨ」について、「ほんとにそうだよね」という単なるあいつちの意味しか持たないと述べているが、筆者

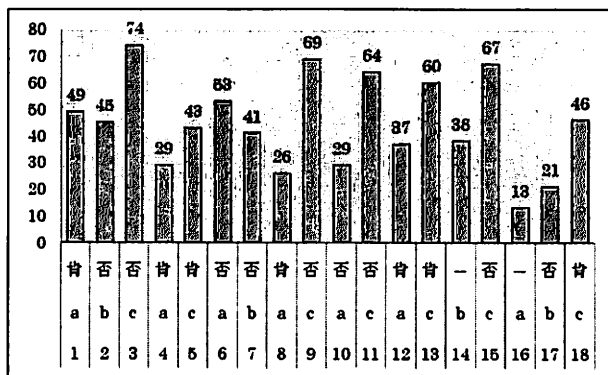


図7【同意の程度と否定・肯定によるAの使用率の違い】

は本調査を通して、Aに分類される十二種類のあいつちは、使われる場面や同意の程度によって意味合いに微妙な変化がみられるのではないかと思う。

今回アンケート調査に協力してくれた生徒の中に、自由記述欄にこれらのあいつち表現に関して左のような意見を書いてくれた人が数名いた。

- ・「ジャカイヨ」だけであいつちがうてる。(男、一六歳)
- ・「ダカラヨ」しか使わない。文末の上げ下げで使い分ける。(女、一七歳)

実際に、回答欄に「ジャカイヨ↑」と、文末に矢印をつけ文末上昇イントネーションが分かるように記入してくれた者や、「ジャカイヨ↑↑」、「ジャカイヨ」など、記号を用いて同じ「ジャカイヨ」でもそれぞれニュアンスが異なることを示してくれた者も数人いた。つまり、前述の通り同意の程度が高い場合に「ジャ」系の使用率が高くなるという事実がある一方で、一種類のあいつち表現をイントネーション等で使い分けている者もいるということである。上京した友人が「ダカラヨ」に代わる言葉を見出せず困惑したり、かといってその東京語訳が「ほんとにそうだよね」と言われてもしつくりこなかった理由は、そこにあるのだと思う。

本調査の対象としてきたAに分類されるあいつちは、宮崎県における新方言として位置づけられているが、その使用の頻度や役割を鑑みると、特に若年層の方言会話には必要不可欠なものになっていっていると言える。今回の調査は宮崎市の中学生・高校生に限ったものであったため、これらがどの程度普及しているのか、またその世代差など、未だ明らかでないことも多いが、筆者としては方言による会話のより円滑に進める術として、後世に受け継がれてほしい方言の一つである。

六、参考文献

- 岩本実(一九八三)「宮崎県の方言」『講座方言学』九、国書刊行会
- 加藤薫(一九九五)「原因・理由」を受けない「だから」―だから

の主体的側面の突出―『早稲田日本語研究』³
岸江信介(一九九六)『宮崎方言の動向』『比較文化研究』第二号 宮崎

国際大学研究紀要

――(一九九八)『南九州方言におけるダヨー・デスヨのネオ方言的
性格について』『九州方言におけるネオ方言の実態』科研費
報告書

木部暢子(一九九五)『方言から『からいも普通語へ』『言語』一一

別冊 大修館書店

九州方言学会(一九六九)『九州方言の基礎的研究』風間書房

――(一九九二)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書

房

小西いずみ(二〇〇〇)『東京方言が他地域方言に与える影響―関西

若年層によるダカラの受容を例として―』『日本語研究』第二十

号 東京都立大学国語学研究室

陣内正敬(一九九六 a)『西日本方言の変容と関西方言』『方言の

現在』明治書院

――(一九九六 b)『地域語の生態シリーズ九州篇 地方中核

都市方言の行方』おうふう

陣内正敬・坪内佐智世(一九九五)『地元意識と開放性の共存する

都市方言』『言語』別冊『変容する日本の方言』

太田一郎(一九九八)『西日本ネオ方言調査』に見る鹿児島方言話者

の言語意識と言語使用』『九州方言におけるネオ方言の実態』研

費報告書

早野慎吾(二〇〇八)『宮崎県の言語動態―宮崎県南部息を中心とし

て』『国文学 解釈と鑑賞』七二、至文堂

村上敬一他(一九九八)『九州におけるネオ方言の実態』科研費成果報

告書

【付記】 小稿は平成二二年度首都大学東京 都市教養学部卒業論文とし
て提出したものを元にしています。御指導下さった浅川哲也先
生に御礼を申し上げます。

(くろき あすな・首都大学東京)